

論説紹介

過去の亡霊か？それとも21世紀型国際開発か？

高橋一生

「リベラルアーツ21」代表幹事

Samir Amin, May 29, 2014, “The Revival of the Movement of Non Aligned Countries”,
Other News,

1950年代にパリを中心とした若手論客として従属理論を展開した S.Amin (1931年カイロ生まれ、父はエジプト人、母はフランス人) をご記憶のむきは開発分野の初期世代の方々には多いであろう。また1960年代には国際開発、国際政治分野で非同盟運動の旗手として注目を集めていた S.Amin をご記憶の方々も多いであろう。そのアミンが最近上記の論説を発表し、それが世界の指導者たちに配信され、広く読まれている “Other News” (これは1990年代にロベルト・サビオが、国連事務総長ブトロス・ブトロス・ガリのために始めたもの) に掲載された。

アミンはこの論説で、非同盟運動は東西冷戦のさなかにおいて、西にも東にも与さない途上国の集団であり、冷戦の終結とともに意味を失ったとよく指摘されるがこれは米・欧のでっち上げである、と主張している。非同盟とは世界の市場化に与しない、すなわち市場と同盟しないということであり、自主・自尊の開発路線を重視するということが1955年のバンドン会議の精神なので、それを世界的に展開する運動なのである。したがって、新古典派に対する懐疑が強まるいまこそ、この半世紀にわたる歴史的教訓を生かしつつ、復活させなければならない、と主張している。そのためには、“国際社会としては、、、” として実体は米欧の政策・価値観を途上国に押し付けているのが国際開発の実情であるが、長いことほとんど無視されてきた国連を今こそ重視し、途上国の意見をも反映した “国際社会” の政策・価値観を作りあげなければならない、ことを強調している。

冷戦終結以来4半世紀たち、国際社会は一方で米国を中心としたリベラルな国際秩序に対して、中国、ロシアなどの国権主義のチャレンジが露骨になり、国際協調・国際協力よりもパワー・ポリテイクスがドミナントになる様相を呈してきた。他方において、今現在も46に上る武力紛争が展開されており、さらに、脆弱国家群、破綻国家群が国際社会の主要課題になって久しい。また、20013年12月に発表されたコロンビア大学とドイツのエアベルト財団の共同研究によると、2008年以来、国内のプロテスト運動が世界的に激増してきており、その多くは貧富格差の拡大を課題としている。おそらくこのよう

な状況が影響しているのであろうが、フランスの経済学者トマ・ピケティの「21世紀の資本論」がマルクスの再来として、アメリカにおいてさえも大きな反響を呼んでいるそうである。

アミンの論説もこのような背景のもとに一定の支持を得ることになるのかもしれない。開発における自主・自尊という主張は援助国が表面上は常に支持してきてはいたが、実態はインターベンションの理由を見つけることが“国際”開発の歴史であることに対する糾弾が種々なされてきた。アミンはそれをバンドン会議にさかのぼって行っているのであろう。”Independent Development”の重要性ということがこの論説に一貫して流れる主張であり、半世紀以上にわたる開発の歴史はその重要性をいくら強調してもしたりないことを証明しているというのである。この主張はややもすると、国際社会の国権主義の流れに沿った開発独裁の強化ということにもなりかねない。WWFのカカバツェ総裁（前IUCN総裁）が今年の4月に筆者に国際社会における市民社会活動の弱体化の懸念を表明していたが、1980年代以来の市民社会および市場をも含めた国際開発の模索が続いてきたが、その流れを弱体化させる、というインパクトをアミン論説はもつことになるのであろうか。この点はアミンは一切論じてない。

それとも2014年7月にブラジルにおけるBRICSサミットにおいて合意された、とりあえず2兆5千億円の基金規模のBRICS版世界銀行、BRICS版IMF、および昨年から動きが強まっている中国主導のアジア開銀などのイデオロギー基盤となるのであろうか。アミンの途上国世界における隠然たる影響力からするとこの可能性も排除できない。とくに、中国あるいはBRICS全体が一体どのような世界像を追及しているのか判然としないという批判に明確に答えられてない状況がある。アミンはもしかしてそこを狙ったのかもしれない。

アミン論説は半世紀前の亡霊なのか、はたまた21世紀の開発イデオロギーの複線化を示唆しているのか。あらためて、我々はこの半世紀、国際開発という名のもとに、いったい何をしてきたのであろうかということを考えさせられた。アミン氏とぜひ膝を交えて話し合いたいと思わせる論説である。